

J A 御中
(営農担当部署)

福岡県米・麦・大豆づくり推進協議会
(事務局：J A全農ふくれん 担い手支援課)
(公 印 省 略)

営農情報

高温・少雨の影響緩和に努めましょう！

7月9日の梅雨明け以降、高温・少雨が続いており、水稻・大豆の収量と品質への影響が懸念されます。可能な限り、作物への影響緩和に努めましょう。

1 水稻

- 高温により生育が早まっており、すでに出穂している品種では、登熟期の高温による「白未熟粒」や「充実不足」の発生といった品質の低下が心配されます。
- また、トビイロウンカの発生量は多くはありませんが、高温の年では急激に増加した年（平成25年、28年）があり、注意が必要です。

【対策】

＜早期水稻＞

- 水管理：出穂後20日間は水を切らない。また、可能であれば、水のかけ流しを行い、水温を低く保つよう努める。（「白未熟粒」や「充実不足」の発生防止。）
また、刈り取り5～7日前まで水を溜め、早期落水は避ける。
- 刈り取り：適期になったら、刈り遅れに注意し、速やかに収穫する。
- 収穫した粳は直ちに乾燥し、通風乾燥を基本とする。（胴割米の発生防止。）

＜普通期水稻＞

① 早植え

- 水管理：幼穂形成期に入っているため、水は切らさない。ただし、常時湛水は避け、水がなくなったら新鮮な水を入れる管理とする。（紋枯病の発生防止。）
- 追肥：基肥一発肥料を使用している場合でも、幼穂形成期頃に肥料切れが見られる場合は、出穂10日前頃までに追肥（窒素1kg/10a程度）を実施する。（「白未熟粒」の発生防止。）

② 普通植え

- 中干し：茎数が確保されたら、黒乾状態まで中干しを行う。（過剰分げつ抑制や倒伏の防止。）
ただし、用水確保が難しいほ場では、水尻のせき板を5cm程度にし、雨水をしっかりと保つよう努め、中干しは弱めにする。
- 病害虫防除：紋枯病やいもち病、トビイロウンカの発生に留意し、適期防除を行う。

2 大豆

- 乾燥により茎の節数・分枝数が減少する恐れがあります。また、高温により病害虫が多発する恐れがあり、注意が必要です。（特に、ハスモンヨトウ、カメムシ類。）

【対策】

- ・ 土壤の乾燥を防ぐため、本暗きよの栓を閉める。
- ・ は種・播き直しを行う場合：土壤水分が少ない条件下では、は種深度を深くし、鎮圧する。

表 播種深度の目安

基準	水分が少ない
3cm	基準よりやや深く（5～6cm） ＋ 鎮圧（麦用の鎮圧ローラー活用）

- ・ かん水：夕方、周囲溝と畝溝にかん水を行い、ほ場全体に水が行き渡ったら直ちに水を止める。
 - 出芽前にかん水する場合：畝が冠水しないようにする。
 - うね間かん水の場合：中耕・培土後、うね間が白く乾燥し始めた時や、30mm程度の降雨のあった7日後頃に行う。
- ・ 中耕・培土：本葉期2～3葉期になったら、直ちに行う。
- ・ 病害虫防除：ハスモンヨトウ、カメムシ類などの発生に留意し、適期防除を行う。

以上